まえがき

二〇二二年二月二四日、ロシアはウクライナへの大規模な軍事侵攻を開始した。ロシアは侵攻前に最大で一九万人ともいわれる兵力を国境付近に集結させ、ロシア軍はその圧倒的な兵力をもってウクライナに攻め入り、短期間で勝利を収めるはずであった。少なくともロシアはそう考えていた。

侵攻開始二日後の二月二六日午前八時、国営のロシア通信は「ロシアによる進撃と新たな世界の始まり」と題する記事を「誤配信」した。「私たちの目の前に新たな世界が生まれている」との文言で始まる長文記事は、ロシア軍の勝利を前提に「ロシアは歴史的な完全性を取り戻しつつある。反ロシアのウクライナはもう存在しない。ウクライナは戻ってきた」と宣言した。しかし、この「戦勝記事」はただちに削除された。

ロシア軍は、ウクライナの首都キーウや第二の都市ハルキウなどで、ウクライナ軍による激しい抵抗にあい、四月までに一万人から四万人ともいわれる死傷者を出した。このまえがきを

執筆している時点で、ロシア軍は勝利を収めていない。

ロシア軍による侵攻開始から二カ月余り、世界は多くの衝撃に見舞われ、いまも我々は衝撃のなかにいる。

まず、ロシアの軍事侵攻が国際秩序の根幹を揺るがしたという衝撃である。国連安全保障理事会の常任理事国であり、核保有国であるロシアが、他国の領土の一体性や政治的独立を脅かす武力の行使を禁じた国連憲章や国際法を無視し、大規模な武力行使によって現状変更を試みた。我々は驚愕のなかにいる。

いま一つは、ウクライナ戦争のエスカレーションの可能性である。通常戦力で圧倒的に有利にあるロシア軍がウクライナ軍に苦戦し、戦争は長期化した。局面を打開するために、ロシアは核兵器など大量破壊兵器を使用するのではないか。その先には核戦争が想定されるのではないか。我々は不安のなかにいる。

もう一つは、戦争における非人道的な行為についての衝撃である。ロシア軍は民間人を標的とする攻撃をあからさまに行い、被害の状況はSNSなどを通じて世界中に拡散した。四月初め、ロシア軍が撤退したキーウ周辺地域で多数の民間人の遺体が発見された。こうした事実が写真とともに世界に配信され、ロシアに対する非難の声が高まった。我々は悲憤のなかにいる。

この二カ月余り、驚愕、不安、悲憤を抱きながら、本書の著者が所属する防衛研究所では、多くの研究者がそれぞれの専門から「ウクライナ戦争の衝撃」の意味を考え、そして議論してきた。本書『ウクライナ戦争の衝撃』は、特に地域研究という視点から衝撃の意味を明らかにする試みである。それぞれの国や地域が、ウクライナ戦争による衝撃を如何なるコンテクストのなかで理解し、対応しようとしているのか。これを明らかにしたうえで、交錯するコンテクストのなかで日本を取り巻く戦略環境の現状とその行く先を示す。これが本書の目的である。

その一方で、ウクライナ戦争は現在進行形の事象である。戦争の勃発からわずか二カ月で脱稿し、研究の成果を世に問うことの躊躇いはある。それにもかかわらず、本書の刊行を目指すことになったのは、「ウクライナ戦争の衝撃」が続くなかで、それぞれの国や地域にとっての衝撃の意味を分析し記録することの意義を多くの同僚が共有してくれたからである。

本書の執筆は、新垣拓（第1章）、山添博史（第2章）、増田雅之（第3章）、佐竹知彦（第

4章）、庄司智孝（第5章）が担当した。相澤李帆、小熊真也、吉田智聡は編集作業で刊行プロセスを支えつつ、コラムを執筆してくれた。着想からわずかな期間で本書の刊行が可能になったのは、執筆・編集チームが一丸となり集中的に議論することができたからである。そのための環境を用意してくれた防衛研究所に感謝したい。

もちろん本書における記述は、各々の専門から論じたものであり、著者が所属する防衛研究所や防衛省あるいは日本政府の見解を示すものではない。

インターブックスの小久江潤氏には、本書の着想段階からお世話になった。小久江氏の献身的かつ創造的な編集作業がなければ、本書が出版にたどり着くことはなかった。満腔の謝意を表したい。

令和四年（二〇二二年）五月五日

防衛研究所理論研究部政治・法制研究室長　増田雅之